**平成２７年度　東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費　要求書**

様式１　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（表面）

部　局　名：大学院国際文化学研究科

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **事業名**  **（要求事項）** | 震災の復興過程に関するオーラルヒストリーの記録化、アーカイブ化 | | | | | | | | | | | 継続　・　新規  （どちらかに○して下さい） | | | |
| **代表者** | 所　属　部　局 | | | | | 職 | | |  | | | | | | |
| 大学院国際文化学研究科 | | | | | 准教授 | | |  | | | | | | |
| **組　織** | 氏　　名 | | 所属研究機関・部局・職 | | | | | | 役　割　分　担 | | | | | | |
| 岡田浩樹  高倉浩樹  政岡伸洋  加藤幸治  庄司幸男  伊藤泰弘  小谷竜介 | | 神戸大学大学院国際文化学研究科・教授  東北大学東北アジア研究センター・准教授  東北学院大学文学部・教授  東北学院大学文学部・准教授  NPO法人全国生涯学習まちづくり協会  大曲浜獅子舞保存会会長  東北歴史博物館・学芸員 | | | | | | 代表補佐、現地大学・行政機関との連携  文化人類学、データベース連携  民俗学、現地監督者  民俗学、現地監督者  市民コーディネーター（気仙沼）  市民コーディネーター（東松島市）  民俗学、資料の整理・保存 | | | | | | |
| **要求理由（概要・目的）** | | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．概要**　2012年度から実施してきた事業の成果を踏まえ、現地大学の研究者・学生、連携を重ねてきた行政機関、被災地住民と協力し、仮設住宅からの移転、復旧から復興への節目を迎えた被災地の状況と、大震災後のコミュニティの再構築の過程を記録、保存することを目的とする。行政上の文書資料はもちろん、フィールドワーク、オーラルヒストリー調査によって復興過程、震災前後の変化を多声的に記録する。これによって、住民移転などの複雑な復興プロセスを多面的に検討する記録を被災地にアーカイブやデータベースとして保存する。同時に被災地研究者との淡路における調査を実施し、双方向的な活動を通じて、阪神淡路大震災との比較や今後の震災研究の基礎資料として活用する基礎資料とする。  **２．目的**　本プロジェクトの目的は被災地の復興過程に関する基礎資料を被災地に保存することを第一の目的とする。加えて、被災地の学生や住民が資料収集、保存のプロセスに主体的に関わることで、4年目を迎えた東日本被災者が復興過程、震災前後の状況を見つめ直し、支援を受ける受動的被災者から「東日本大震災からの教訓」を発信する能動的被災者への転換を促す。本プロジェクトは東北大学北東アジアセンターのプロジェクト「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」と連携し、データベース構築、国際的発信（2015年国際ワークショップ）に協力する。 | | | | | | | | | | | | | | | |
| **計　画　・　方　法** | | | | | | | | | | | | | | | |
| 前年度までの事業を継続しつつ復興過程のオーラルヒストリー収集を現地大学・機関、住民と協力しつつ実施する。主たる対象地は宮城県気仙沼市、東松島市である。また、東日本大震災からの復興を牽引してきた研究者や市民に、阪神・淡路の地域がどのような未来像を描く材料を提供するかについて共同で検討する。北淡路、長田を神戸大学側、東北側の学生双方が踏査し、比較の視点を身につけた上で最終終報告書の編集という共同作業を通じ、学生としての基礎的なスキル向上もはかる。最終報告書はwebなどで公開し、収集した資料全体については東北および関西の研究教育機関・地方自治体を通じて地域住民に還元を図る。宮城県・東北大学のデータベース作成事業とも連携し、成果を共有する。具体的なタイムテーブルは下記のとおりとなる。事業費の主たる用途は神戸大学および宮城側教員の調査出張旅費と宮城、神戸双方の現地調査の学生雇用、またワークショップとシンポジウム会場費である。  **図　2015年度タイムテーブル**   |  |  |  |  |  | | --- | --- | --- | --- | --- | | 準備段階（4月～8月）  （神戸・東北双方学生のリクルートと事前教育、短期のフィールドワークを含む） | 集中的調査  （8月～9月）東北側神戸招聘 | 現地住民へのフィードバックと確認 | 資料整理と計画の見直しなど補足的活動期間 | アーカイブデータ化、現地での報告書・資料集 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| **期待される具体的な効果･今後の展開（継続の場合は、成果等も含め詳細に記載すること）**  （裏面） | | | | | | | | | | | | | | | |
| **１．期待される具体的な効果**　基礎データを現地学生・住民が主体的に蓄積し、かつ阪神淡路大震災との比較という視点を持つことで、「東日本大震災からの教訓」を発信することを促す点に具体的効果が期待される。次の4点に集約される。①東日本大震災被災地へ阪神淡路大震災後20年の復興過程の経験や知識を転移する。②基礎資料蓄積と被災地への還元：震災被害の現状と復興の過程、そしてコミュニティ再構築のプロセスを、その中に関与しつつ関わりながら記録することで基本的資料を蓄積し現地に還元する。③復興への学生や住民の効果的な関与：上記にともに関わることで、今後復興に関して深い理解と優れたビジョンを備えた学生を養成できる。④宮城および神戸の学生による調査研究の継続：活動を通し、学生が被災地を調査するスキルを習得し、調査への意欲をもつことで、共同調査終了後も主体的に調査を継続することを促進する。これらは、前年度実施した事業のなかでもっとも効果があった被災地の住民や学生と神戸大学学生の阪神淡路大震災被災地での巡検、ワークショップを踏まえてのことである。被災地学生、住民からは被災体験を客体化し、復興の次のステップを見通した活動を考える契機になったという感想が寄せられている。  **２．今後の展開**　本計画に参加した学生がその事業を引き継いで行くことを期待しており、今後は地方自治体の復興プロジェクトに復興過程のオーラルヒストリーデータ収集をいかに組み込むか、これに神戸側の研究者が東北大学等の研究者や学生と連携しつついかにサポートしていくかが課題となる。すでに東北大学等の関係者（学生および教員）や自治体とは復興のプロセスの調査・資料蓄積、研究・教育ネットワークを構築しており、次の展開を協同で検討する段階である。被災地の現状は現在では復興過程において被災地住民の個別の状況が表面化し、一方でコミュニティ、有形・無形の民俗文化などソフト面での復興状況は把握されているとは言い難いのが実情である。今後も実態把握のための調査は必須の課題であるもの、人的資源が不足している。現地でのオーラルヒストリー収集を主体的に行う人材育成の段階的育成とそれらの人材のサポート、協同で他の自然災害等に応用しうる「震災の知」の発信の検討を神戸大学の研究者がいかにサポートするか次の段階として検討する。なお、今回の申請にあたっては、前年度の代表者の岡田が部局役職に就いたため、梅屋に実質的な責任者を交代した。 | | | | | | | | | | | | | | | |
| **経　費** | **使　用　内　訳** | | | | | | | | | | | | | | |
| 合　　計 | | | 旅費・謝金 | | | 事業費 | | | 消耗品費 | | | | その他 | |
| 1,000千円 | | | 720千円 | | | 60千円 | | | 0千円 | | | | 220千円 | |
|  | | |  | | |  | | |  | | | |  | |
| **使　用　内　訳　明　細** | | | | | | | | | | | | | | |
|  | 品　名 | | | 仕　様 | | | 単　価 | | | 数　量 | | 計 | | |
| 旅費・謝金 | 旅費（神戸⇔宮城）  謝金  現地コーディネート  録音書き起こし | | | 3泊4日  1日8時間  1日8時間  1時間 | | | 90,000円  6,000円  8,000円  13,000円 | | | 5  10  10  10 | | **計** | | 450,000円  60,000円  80,000円  130,000円  720,000円 |
| 事業費 | 会場費 | | | 神戸大学など | | | 20,000円 | | | 3 | | **計** | | 60,000円  60,000円 |
| 消耗品費 |  | | |  | | | 円 | | |  | | **計** | | 0円 |
| その他 | 印刷費など | | | シンポジウムフライヤ  シンポジウム報告書 | | | 10,000円  190,000円 | | | 3  1 | | **計** | | 30,000円  190,000円  220,000円 |
| **他の事業等での配分状況の有無（現在申請中も含む）　　　　□有　　・　　■無** | | | | | | | | | | | | | | | |
| （「有」の場合，下記項目に○印を付してください）  ・【国立大学協会】震災復興・日本再生支援事業　　申請中　・採択済  ・その他（　募集機関名：　　　　　　　　　事業名：　　　　　　　　　　　　）　申請中　・採択済 | | | | | | | | | | | | | | | |

**平成２７年度　東北大学等との連携による震災復興支援災害科学研究推進活動サポート経費**

**実施報告書**

部局名：国際文化学研究科

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 事　業　名 | 震災の復興過程に関するオーラルヒストリーの記録化、アーカイブ化 | | | | | | |
| 代　表　者 | 所属部局：国際文化学研究科　　職：准教授　　　　氏名：梅屋　潔 | | | | | | |
| 事業の実施内容 | 2012年度から実施してきた事業の成果を踏まえ、現地大学の研究者・学生、連携を重ねてきた行政機関、被災地住民と協力し、仮設住宅からの移転、復旧から復興への節目を迎えた被災地の状況と、大震災後のコミュニティの再構築の過程を記録、保存。行政上の文書資料、フィールドワーク、オーラルヒストリー調査によって復興過程、震災前後の変化を多声的にアーカイブやデータベースとして保存する。被災地研究者との淡路における調査を実施し、双方向的な活動を通じて、阪神淡路大震災との比較や今後の震災研究の基礎資料として活用する基礎資料とする。被災地の学生や住民が資料収集、保存のプロセスに主体的に関わることで、4年目を迎えた東日本被災者が復興過程、震災前後の状況を見つめ直し、支援を受ける受動的被災者から「東日本大震災からの教訓」を発信する能動的被災者への転換を促す。 | | | | | | |
| 事業実施の成果 | 本経費は、学生、教員、市民の交流を可能としたこと、東北側の学生・院生と密な作業と議論が可能となったことにより、東北側の修士論文、神戸側の共著論文などの成果を見た。また、5年を経て、地域住民が「ジオラマ」（東松島市）、地域興しのテーマ発掘（気仙沼市）などを「主体的」に要望するようになったことも大きな収穫である。地域興しのテーマについては文化庁との関係ですでに成果が出てきており、ジオラマについては、それをつくることができる専門家との橋渡しも可能となる。また、目に見えないところで現地行政のOBが協力者となっていることもあり、現役の行政の職員とOB（現在では市民）との意見の橋渡しをする機能も果たすことができている。さらには、学生の一人は、期限付きとはいえ復興庁の職員として復興現場で働くことになるなどの副産物も見られる。 | | | | | | |
| 今後の計画 | これまでに築いたネットワークを、その密度はそのままに拡大することが求められている。主たるキイ・インフォーマント（情報提供者）から紹介を繰り返しまたフィードバックするこの事業の方法は、現地での評価も高く非常に有力であることが確認されている。「雪だるま法式」Snow Ball Methodにもとづく話者のネットワーク拡大とその継続的フィードバックというPDCAサイクルの継続と漸進的拡大により、被災地のコミュニティやネットワークも主体的な知的活力を回復するものと確信する。「ジオラマ」「文化を活かした地域興し」の「文化資源」開拓などを具体性から乖離しないかたちで事業継続していきたい。 | | | | | | |
| 配　分　額 | 780 | | 千円 | 支　出　額 | 780 | 千円 |  |
| 支出額内訳 | 区　　分 | 員数 | | 単価（円） | 金額（千円） | 備　考 | |
| 旅費（7月）  レンタカー，ガソリン代  旅費（8月）  レンタカー，ガソリン代  旅費（10月）  レンタカー，ガソリン代  旅費（11～12月）  レンタカー，ガソリン,  旅費（3月）  レンタカー，ガソリン代  物品費  宅配代 | 1名  1名  1名  1名  2名  （1名） | |  | 71,900  17,387  137,300  24,153  58,720  11,333  144,360  86,266  166,860  34,938  24,159  2,624 | 7/18-20出張  8/2-9出張  10/24-25出張  11/28-12/6出張  3/2-6，3/22-25出張 | |
| 計 | 6名 | |  | 780,000 |  | |
| 本事業に係るご意見・希望等 |  | | | | | | |

別紙

活動概略とおもだった成果を以下に列挙する。

【活動概略】

（気仙沼班）

　引き続き、気仙沼市の無形文化財の実態調査を行った。また高台移転の実例に立ち会ったほか、気仙沼市議、市長の高台移転・防潮堤など復興事業に関する認識に直接触れる機会をもった。「復興のトップランナー」とも言われる女川の運動公園住宅の問題点を復興庁の職員の案内で見聞し、気仙沼の高台移転の将来像を考えさせられた。また、これまでのアーカイブを見直し、修験道の影響がそこここに見て取れることを発見し、この地域の古層、コミュニティのかたちを考える際に修験の果たした役割が過小評価できないことを確認した。このことは、文化を活かした地域活性化事業に効果的なコンセプトたり得ると期待される。教育長からは、「どこにでもいる人」と認知され、気仙沼をすべて丹念に調べている人との評価をされている。また八幡神社宮司からも、「今まででもっとも深くまで突っ込んでいる」と評価された。社交辞令であろうから額面通りにはとることはできないが報告しておく。

（東松島班）

　本年度は引き続き、東松島市矢本の旧大曲浜獅子舞保存会を中心に、復興住宅への移転に伴う旧大曲浜地区の状況、獅子舞の活動について、東北学院大学大学院生とともにフィールドワークを行った。

なお、うち1名の大学院生が、震災前後の大曲浜獅子舞保存会と地域社会を題材とした修士論文を出した。また、震災5年、復興住宅への大曲浜旧住民の移転が本格化する中で、津波によって消失した旧大曲浜の記憶を残したいという地域住民の要望があり、本プロジェクトを通して得たインタビュー資料を生かすとともに、なんらかの形で保存するための方策について東松島市と協議に入った（東松島市副市長、震災復興課窓口）

【出版物】

1. 梅屋潔「数百年後の年中行事を占う小径（こみち）」『季刊民族学』148号、46-55頁、2014年4月
2. 梅屋潔「「民族」としての「民俗学者」」『歴博』191号、7-10頁、2015年7月
3. 土取俊輝・相澤卓郎・梅屋潔「気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅱ）」『地域構想学研究教育報告』第6号、東北学院大学教養学部地域構想学科、53-63頁、2015年12月

【公開講演・口頭発表など】

* 1. 岡田浩樹「阪神大震災20年と東日本大震災の今」兵庫県阪神シニアカレッジ講座『マイスターゼミナール』トレビエ（尼崎女性センター）、尼崎市、講演、2015年4月9日。
  2. 岡田浩樹「グローバル化する同時代への創造力－文化人類学、フィールドワーク」「同時代的課題をフィールドワークする－東日本大震災、そして宇宙人類学－」（インスパイア事業における「特別授業」「異文化の理解―日本の中の世界」）兵庫県立東播磨高校、2015年6月8日。
  3. 梅屋潔「オーラルヒストリーと時間―東日本大震災後の復興過程を中心にして」第202回神戸大学RCUSSオープンゼミナール（司会北後明彦神戸大学都市安全研究センター教授）、共催神戸市消防局、後援兵庫県、神戸市役所4号館、2015年10月17日。
  4. 梅屋潔「災害で移転するということ―ウガンダ・ブドゥダの事例を通して高台移転を考える」東北大学東北アジア研究センター共同研究「災害と地域文化遺産に関する応用人文学研究ユニット」（研究代表者高倉浩樹）2015年度第3回研究会、東北アジア研究センター、4階会議室、2016年2月7日。

【国際学会・シンポジウム・ワークショップ発表】

1. An Anthropological Study on the difference between Tohoku Earthquake and Kobe Earthquake; The Appearance of the Chimera “KOMINITEI” after disaster in Japan, International Workshop Exchange Program between　University of Kobe and University of Naples L'Orientale， Workshop“Mobility, migration and its discontents: rethinking political and cultural borders in Europe and Japan.18th September 2015,Procida, Italy.(発表言語：英語)
2. Modernity Emerging in the process of Reconstruction after Big Earthquake in Japan; The complex Relationship between the Community Resilience and the Planning by city engineering，2015 International Conference of Japan Anthropology Workshop, 10th September2015, Boğaziçi University, Istanbul, Turkey. （使用言語：英語）

【協力者など本事業の関係者の業績（抜粋）】

※金菱清東北学院大学教授とは本年度は、具体的には連携していないが、密に情報交換しつつ事業を実施しているためとくにあげておく。③については、協力者の政岡伸洋教授、小谷竜介氏が寄稿している。両者にはそのほかにも数多くの業績があるが、割愛する。

1. 金菱清2016『震災学入門』筑摩書房
2. 金菱清2016『呼び覚まされる霊性の震災学』新曜社
3. 橋本裕之・林勲編2016『災害文化の継承と創造』臨川書店